



平成28年6月29日

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の中間評価結果について

この度、「未来医療研究人材養成拠点形成事業」について、中間評価を実施しましたので、その結果をお知らせします。

1. 事業の概要

本事業では、急速に進展する高齢化等に伴う医療課題の解決に貢献し、国内外の医学・医療の発展を強力に推進するため、下記のテーマA・テーマBについて、新規性・独創性の高い特色ある取組にチャレンジする大学の事業を支援しています。

【テーマA】メディカル・イノベーション推進人材の養成

本テーマは、世界の医療水準の向上及び日本の医療産業の活性化に多大に貢献するため、世界の最先端医療の研究・開発等をリードし、将来的にその成果を国内外に普及できる実行力を備えた人材（イノベーションを推進できる人材）を養成することを目的としています。

【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成

本テーマは、国民が将来にわたって安心して医療を受けられる環境を構築するため、地域の医療機関や市町村等と連携しながら、将来の超高齢社会における地域包括ケアシステムに対応できるリサーチマインドを持った優れた総合診療医等を養成することを目的としています。

＜事業計画期間＞ 25年度選定事業（25件） 25～29年度（5年間を予定）

2. 中間評価について

中間評価は、各選定事業（25件）の進捗状況を検証し、適切な助言を行うことで、今後の事業の実効性を高めること、及び本事業の趣旨や成果を社会に情報提供することを目的としています。

未来医療研究人材養成推進委員会（別添1）において中間評価の実施方法を決定し、同委員会の評価委員（別添2）が分担して書面評価・面接評価を行ったうえ、現時点での進捗状況や成果等を確認するとともに、当初目的通りの達成が可能か否かについて、評価結果を別添3のとおり取りまとめました。

<本件担当> 高等教育局医学教育課大学病院支援室

担当：室長補佐 中湖 博則

病院第二係長 齋藤 雅彦

電話：03-5253-4111（内線 2578） 03-6734-2578（直通）

未来医療研究人材養成推進委員会委員名簿

あきやま 秋山	まさこ 正子	株式会社ケアーズ代表取締役 白十字訪問看護ステーション統括所長
いけだ 池田	やすお 康夫	一般社団法人日本専門医機構理事長
おおしま 大島	しんいち 伸一	国立長寿医療研究センター名誉総長
こもり 小森	たかし 貴	公益社団法人日本医師会常任理事
こんどう 近藤	たつや 達也	独立行政法人医薬品医療機器総合機構理事長
さかい 堺	つねお 常雄	一般社団法人日本病院会会長
さるた 猿田	たかお 享男	慶應義塾大学名誉教授
つじ 辻	てつお 哲夫	東京大学高齢社会総合研究機構特任教授
つだ 津田	たかこ 喬子	名古屋市立東部医療センター名誉院長
とよだ 豊田	ながやす 長康	鈴鹿医療科学大学学長
ふくい 福井	つぐや 次矢	聖路加国際病院長
ふるや 古屋	あやか 彩夏	JR東京総合病院小児科医長

(五十音順 敬称略 計12名)

未来医療研究人材養成推進委員会 評価委員名簿

※評価委員は、書面審査を分担して実施

【テーマA】メディカル・イノベーション推進人材の養成

浅田祐士郎	宮崎大学医学部教授
飯田香緒里	東京医科歯科大学産学連携研究センター長
石埜 正穂	札幌医科大学医学部教授
狩野 光伸	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授
小早川雅男	国立国際医療研究センター病院臨床研究相談室長
坂中 千恵	東京大学医学部附属病院臨床研究支援センター准教授
澤 芳樹	大阪大学大学院医学系研究科長
八重樫伸生	東北大学病院長
柳田 素子	京都大学大学院医学研究科教授

(五十音順 敬称略 計9名)

【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成

浅見 豊子	佐賀大学医学部附属病院診療教授
有岡 宏子	聖路加国際病院部長
井藤 英喜	東京都健康長寿医療センター長
葛西 龍樹	福島県立医科大学医学部教授
菊地 正悟	愛知医科大学医学部教授
木下 牧子	医療法人愛の会副理事長
小林志津子	東京医科大学医学部兼任講師
四方 哲	三重県立一志病院院長
玉腰 暁子	北海道大学大学院医学研究科教授
中村 順子	秋田大学大学院医学系研究科教授
新田 國夫	医療法人社団つくし会理事長
堀江 重郎	順天堂大学大学院医学研究科教授
松井 邦彦	熊本大学医学部附属病院特任教授
丸山 泉	一般社団法人日本プライマリ・ケア連合会理事長
安田あゆ子	名古屋大学医学部附属病院医療の質・安全管理部副部長

(五十音順 敬称略 計15名)

「未来医療研究人材養成推進委員会」所見

平成28年6月29日

1. 事業の概要

近年、医療の更なる高度化・効率化や、治療法が未確立な疾患への対応等が求められているとともに、従来の医学・医療の枠組みでは捉えきれない学際領域のニーズが増大しており、また、健康・医療の分野は我が国の成長分野として位置づけられ、世界に日本の健康・医療関連産業を展開して国富の拡大に繋げることが期待されている。

また、今後、急速な高齢化の進展（2025年には65歳以上人口が3割を超える）が見込まれるなか、特に、医療面では、「地域包括ケアシステム」のなかで、他職種と連携してリーダーシップを発揮することができ、さらには高齢社会に伴う医療ニーズの変化に対応し得るリサーチマインドを持ち、医療の進歩と改善に資する臨床研究を遂行することのできる医師が求められている。

本事業は、これらの医療課題の解決に貢献し、国内外の医学・医療の発展を強力に推進できる人材を養成するため、以下のテーマA・テーマBについて、平成25年度から取組を開始している。

【テーマA】メディカル・イノベーション推進人材の養成

世界の医療水準の向上及び日本の医療産業の活性化に多大に貢献するため、世界の最先端医療の研究・開発等をリードし、将来的にその成果を国内外に普及できる実行力を備えた人材（イノベーションを推進できる人材）を養成することを目的とする。

【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成

国民が将来にわたって安心して医療を受けられる環境を構築するため、地域の医療機関や市町村等と連携しながら、将来の超高齢化社会における地域包括ケアシステムに対応できるリサーチマインドを持った優れた総合診療医等を養成することを目的とする。

2. 中間評価で確認できた成果

本委員会では、3年目を迎えた本事業の進捗状況や成果を検証し、評価結果を各大学にフィードバックすることにより、今後の事業の推進に役立てることを目的として中間評価を行った。

教育プログラム・コースの構築状況については、平成27年9月末時点で新たに111の教育プログラム・コースが開設され、受講生の数は基本コース、インテンシブコースの合計で10,000人を超えている。

また、各大学の取組内容においては様々な工夫や努力が確認され、以下のような成果が現れつつあることについては、本委員会としても高く評価する。

【テーマ A】

- ・ 学生の専門分野に応じた国内外の企業でのインターンシップが可能なプログラム
・ コースの構築による実践的な教育の実施
- ・ 諸外国のイノベーション拠点や産業界と連携した教育効果の高いプログラムによる学生等の意識の変化
- ・ 医療機器等の実用化のためのプロセスを学ぶことによる参加学生等全体の興味や関心の向上

【テーマ B】

- ・ へき地を含む様々な医療機関との連携により、卒前・卒後の双方で幅広く地域医療を学べるプログラムの構築
- ・ 総合診療に求められるチーム医療を担う多職種の学生が、それぞれに貢献し得る学生教育の展開
- ・ リサーチの実践による研究発表や英文・和文での症例報告

3. 現状の課題

取組によっては下記のような課題が見られた点は改善が求められる。

【テーマ A】

- ・ メディカル・イノベーションの創出に貢献できる人材を養成するため、産業界等の外部との連携強化によるPDCAサイクルの構築が必要
- ・ バックグラウンドの異なる受講生に対して、統計や知的財産、薬事等、イノベーションの創出に必要な知識を習得させるための配慮が必要

【テーマ B】

- ・ 本事業のテーマである「リサーチマインド」を涵養するための取組について、一層の工夫が求められるとともに、効果の測定が必要
- ・ 地域医療機関での実習において、見学程度に留まらず診療参加型の要素を盛り込むことが必要

【両テーマに共通する課題】

- ・ 受講者数が目標に達していない
- ・ 教育効果の測定及び評価のための取組が不足しており、教育内容の自律的な改善が十分ではない
- ・ 取組の情報発信が不足しており、拠点以外の大学や地域の医療機関に波及させるための取組が十分に行われていない

なお、各取組により、事業計画や連携大学の有無、地域の実情等がそれぞれ異なることから、今回の中間評価は各取組の内容を比較して優劣をつけるものではなく、各取組が掲げた当初計画の進捗状況や本事業の目標が達成できるか否かを評価したものであることに留意いただきたい。

4. 今後の期待

本事業の趣旨に沿った優れた人材を多数輩出するため、今後、各取組には、今回の中間評価結果における本委員会のコメントや、以下に記載の事項等を踏まえ、プログラムの必要な見直し等による課題の解決に向けた改善を図り、取組の一層の推進を期待する。

1. 開設した教育プログラム・コースで受け入れている受講生や今後輩出される修了者に対する満足度調査、フォローアップ調査等を通じて、教育効果を把握・評価し、プログラム・コースの改善に努めること。
2. 複数の採択大学が共同でシンポジウムや研修を開催したり、教員や学生が相互に交流を深めたりすること等により、教育プログラム・コースを設置した大学の個別の取組の成果を大学間で共有し、本事業の成果を最大化できるよう取り組むこと。

3. 事業の責任体制を明確にした上で、限られた部局・講座等に取り組ませるのではなく、全学的な実施体制で取り組むこと。
4. 補助期間終了後の事業継続を前提に、事業継続のための具体的な方針を検討すること。
5. 採択大学以外の大学が本事業における各大学の取組の結果を参考にできるよう、各取組の目的、実施内容、結果についてホームページ等の活用による一層の情報発信に取り組み、アクセス数の検証等により継続的な見直しを行うこと。

取組概要及び中間評価結果

＜総合評価結果＞

評価	総合評価基準	件数		平成28年度補助金額への反映
		テーマA	テーマB	
S	順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を十分に達成し、当初目標を上回る効果・成果が期待できると判断される。	0件	1件	減額なし
A	順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	4件	8件	12.0004%減額
B	おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	6件	5件	18.0006%減額 (12.0004 × 1.5%)
C	改善事項があり、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の大幅な変更が必要と判断される。	0件	1件	24.0008%減額 (12.0004 × 2.0%)
D	特に重大な課題があり、今後の努力を持っても当初目的の達成は困難と思われるので、補助事業を中止することが必要と判断される。	0件	0件	事業停止

注1)「平成28年度補助金額への反映」は、平成27年度補助金額に対する減額割合を示す。

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	1
大 学 名	群馬大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	地域オープンイノベーションR&D人材養成
事業推進責任者	群馬大学大学院医学系研究科長 峯岸 敬
取組概要	
<p>医療イノベーションに資する高度専門研究者とともに、不足するR&Dマネジメント等の研究支援の専門的人材を養成し、新規医療の創出を加速する。医学系研究科に特別コース「医療開発医科学コース」を新設し、現在設置計画中の医理工連携「群馬大学国際メディカルイノベーションラボラトリー」、「インターフェース人材育成プログラム」との緊密な連携のもとに実効的に機能させる。特別コースでは、企業、PMDA、国立医薬品食品衛生研究所、群馬県などの教育・研究参画によるオープン教育カリキュラムを展開、情報・知財管理、レギュラトリー・サイエンス等を含んだ系統的専門教育を実施し、学位研究をイノベーションラボラトリーとともに広範に展開する。また、女性院生優遇措置、インテンシブコース開講、医学部生臨床前実習講義への関連講義の組み込み等を実施し、人材教育の普及を図る。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○新規医療の開発・創出の工程、方法論等を知る機会を提供する等、充実した教育プログラムになっている。 ○医学部5年生全員を対象に医療イノベーション教育を導入したことは、非常に大きな意義がある。</p> <p>●当初目標に掲げられている新規医療シーズの創出あるいは学内ベンチャーの設立等について、進捗状況を明らかにすることが必要である。 ●取組の成果や効果について、定量的に評価する仕組みが必要である。 ●医療イノベーション人材の養成に資するため、教育内容に一層の新規性が求められる。 ●企業等との連携を強化し、本事業の輩出人材となるインテンシブコースの履修者を大幅に増加させる努力が必要である。 ●女性院生優遇措置の内容をより明確にする必要がある。また、優遇がむしろ女性院生のキャリアアップを阻害することがないように検討する必要がある。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	2
大 学 名	千葉大学
テ ー マ	テーマA: メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	未来医療を担う治療学CHIBA人材養成
事業推進責任者	医学研究院長 教授 中山 俊憲
取組概要	
<p>千葉大学医学部の100年以上にわたる臨床医学推進の伝統を基に、「治療学イノベーション」の視点で医学部から大学院までの一貫的教育システムを導入し、先見性と柔軟性、幅広い視点を有し、将来の医療イノベーションを担う人材を輩出することを目的とする。医学部3年生全員がイノベーション医学教育を受け、希望する学生は4年から5年生の間にイノベーション基礎力をつけるためのゼミや実習に参加する。医科学修士課程の学生も医学部生とともにゼミや実習に加わり、異なるバックグラウンドを持つ学生同士で切磋琢磨することにより、イノベーション知的融合の素地とともに独自の能力発展の基盤をつくる。博士課程では実践力を養うための特別ローテーション演習や国内外企業実習などを組織する。医学部、薬学部、工学部の先進的教員に加え、製薬企業や政府機関および海外の開発研究機関の客員教員の参画によるイノベーション医学の教育システムを構築する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。</p> <p>(コメント) ○: 優れた点等 ●: 改善点等</p> <p>○教育プログラムは計画通りに開設され、コース履修者も順調に成果をあげていると評価できる。また、海外大学・製薬企業との連携体制の構築も進んでいる。</p> <p>○本取組を知った他学部学生が大学院医学研究院を受験し、2期生として加わり、異なる分野同士の大学院生が切磋琢磨している点は高く評価できる。</p> <p>○履修学生に対するアンケート等の回答から、海外での取組内容を日本で取り込もうとする意識の変化など、学生の能動的学習が促されており、それが学生の行動に具現化されている。</p> <p>●大学院生に対する教育・指導体制の充実と、大学院生受講者の増加を図る必要がある。</p> <p>●大学院生あるいは少なくとも臨床医として本取組の活動に科学的に関与できる人材の増加が望まれる。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	3
大 学 名	東京大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	臨床発実用化マネジメント人材養成拠点
事業推進責任者	特任教授 木村廣道
取組概要	
<p>本事業は、TRプロジェクト推進のために有用な人材を養成し、TR活性化を通じてメディカルイノベーションに貢献することを目的とする。すなわち、i) 異分野融合型のプロジェクトを総合的にマネジメントする人材、ii) プロジェクトに必要な実務能力・知識を備えた医師・研究者、iii) プロジェクトを主体的に実施できる臨床医(例: 医師主導治験の治験責任者)を育成することを目的とする。i)~iii)の実現に必要なスキル・マインド、ニーズ探索能力の養成等について、外部機関と共同して独自カリキュラムを作成する。教育対象は、主として将来的に医師としてTRに関わるものを想定するが、上記i)、ii)においては、工学系、薬学系その他領域の研究者も含まれる。医工薬系の学部生、大学院生、研修医を対象に「医療イノベーション先導人材養成コース」を設置すると同時に、東大病院に所属の医師等に対する教育の機会を提供する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○ビジネスコンテストにチャレンジさせ、さらにビジネス化に向けた指導等による実践的な経験をさせたことは大きな意義がある。また、海外アカデミアの成功モデルを活用し、創意工夫を重ねている点も評価する。</p> <p>○イノベーター育成コースについて、学部・大学院とも複数の分野から学生を受け入れている点は優れている。</p> <p>○シンポジウム等を活発に主催し、学外からの関心の高さも見てとれることは評価できる。</p> <p>●本取組のコースでトランスレーショナルリサーチ(TR)のベースとして必要となる生物統計、知財、薬事等の専門的スキルを身につけることが難しいことを考えると、当該養成コースと連携する等の工夫が求められる。</p> <p>●臨床医としてTRの中核的な役割を担う人材との目標設定に対して、研究成果のビジネス化に長けた人材の育成に変更されているように捉えられる。</p> <p>●イノベーター育成コースが目標数を大きく下回っている。カリキュラムの工夫やリクルート活動の強化が必要である。</p> <p>●他大学等への普及について、より積極的に波及する方法を実践してもらいたい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	4
大 学 名	東京医科歯科大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	IQ・EQ両者強化によるイノベーター育成
事業推進責任者	大学院医歯学総合副研究科長 医学部長 江石 義信
取組概要	
<p>本補助事業の全体の目的は、知識/技術に加え、(1)EQを備え、(2)開発から応用までの全体像を十分理解し、基礎医学/臨床/医療サービス/医療政策分野において現場での変革につながる成果を出せる人材(イノベーター)を養成することである。</p> <p>世界的に医学・医療の変革が求められる中で、わが国は先導的な役割を果たすことが期待されているが、それを担う人材が不足している。我が国では高い知識と技術(IQ)習得のための教育は充実されてきた一方で、EQの強化が高等教育に至るまで不十分であり、研究/開発に関わる人材における開発から応用までの全体像の理解も不十分である。これらの問題点が我が国の医療研究分野におけるイノベーターの不足に強く影響していると考えられ、かかる人材を養成するための教育プログラムの開発と、それを生かしたイノベーターの養成が強く求められている。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○学内のニーズにも合致していたと考えられる取組が進められており、概ね順調に進捗していると評価できる。</p> <p>○1年次の履修学生による、本取組で学んだことを活用した新入生向けのプロモーションビデオ作成は非常に特色ある試みである。</p> <p>○ワークショップ形式のプログラムが個人の関心から對他貢献に向かうように設計されていることは評価できる。</p> <p>●28年度から開始する大学院生への教育については、これまでの活動との関係及びその連携による教育効果を明らかにした上で、さらに具体的な計画が必要である。</p> <p>●イノベーターとしての能力向上を定量的に評価できる仕組みが必要であり、産業界との連携を強化し、産業界からイノベーター能力を向上するための教育法や評価法等を取り込むこと等が求められる。</p> <p>●外部評価委員として、産業界等、学術系以外の委員を参加させることの検討が必要である。</p> <p>●ジェンダーバランスについての取り組みがあると望ましい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	5
大 学 名	金沢大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	第三の道:医療革新を専門とする医師の養成
事業推進責任者	医薬保健学域長・教授 井関 尚一
取組概要	
<p>医療の革新を担う医師は、すぐれた研究医であることが前提となり、かつ臨床課題の解決のために研究成果を実用化する能力を持つ必要がある。この考えに立ち、本事業では医学部(本学では医学類)学士課程、卒後初期臨床研修、大学院医学博士課程を一貫した「メディカル・イノベーションコース」を設置する。学士課程では研究への動機とグローバルな視野の涵養を行い、初期研修から大学院博士課程では医療革新において実績のある特定専門分野の指導のもとに、実用化を視野においた学位研究をいち早く開始させる。また大学院の「メディカル・イノベーションプログラム」に基づき、学内外、国内外の機関や企業の協力を得て、医薬品、医療機器、診療技術の開発や規制に必要な知識や思考法を講義と演習により教育し、研修も行なう。修了後のキャリアとして、男女医師が企業等に就職し、また自ら起業する道も開く。本事業で養成するのは医療革新を専門とする医師である。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○コース、講義、研修の対象者が多岐に渡っており、教育機会が充実している。</p> <p>○学生が医療開発の具体的なプロセスで中心的に関与する等、顕著な効果が得られている。実践英語教育の実施も魅力的であり、成果が出ている。</p> <p>○医療開発や臨床研究への理解が、学生のみならず教職員にも浸透しつつある。また、企業や地元医療機関との連携等、多方面に効果が及んでいる。</p> <p>○情報が分かりやすく、ナビゲートも容易なホームページが作成されている。</p> <p>●トランスレーショナルリサーチ教育の内容について、知財・関連法規・倫理教育等の充実を期待したい。また、グローバルな視点に対する取組についても検討してほしい。</p> <p>●事業目標の国内外での医療イノベーションを推進できる人材養成のためには、従来の教育内容に留まらないさらなる検討、改善が求められる。また、各プログラム参加者や関係機関との連携による効果が期待できるような仕組みを検討してほしい。</p> <p>●シンポジウム等の開催についてより積極的に取り組んでいただき、学外からの参加者を増やす工夫を検討してもらいたい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	6
大 学 名	大阪大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	国際・未来医療のための人材養成拠点創生
事業推進責任者	大学院医学系研究科長 澤 芳樹
取組概要	
<p>大阪大学は、橋渡し研究(TR:トランスレーショナルリサーチ)拠点として「未来医療開発部」を設置し、文科省橋渡し研究プログラムを実践しながら大学発創薬・医療機器や再生医療の実践とそれに不可欠な人材育成を行ってきた。さらに、日本発の医薬品・医療機器、医療システムの海外展開、世界の健康増進、日本医療の国際貢献のため「国際医療センター」を2013年設置し、メディカルイノベーションに取り組んできた。しかし、課題は、これまでに多数の専門家を育てながらTR・国際医療の大学教育プログラムが未整備のため医学部以外を含め次世代の専門家を輩出し得ていない。本課題可決のため、大学全学部・大学院を対象に国際・未来医療のための人材養成コースを設立する。医歯薬・理・工・基礎工の理系と、人間科学・外国語・経済・法・文の文系との文理融合の全学共通教育プログラムのメディカルイノベーター人材養成コースを設立する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○全学部を対象とする健康・医療イノベーション教育を推進するための地固めを着々と進めている。本事業期間終了後の継続を視野に「グローバルヘルスイニシアチブ」が設立され、大学としての推進体制が構築されている点は評価できる。</p> <p>○学生の種別により教育内容を変える等、効果的な教育プログラムを形成している点は優れている。</p> <p>○医学部以外の学部からの履修生が増加傾向にあることから、教育内容の改善や充実等により今後の更なる増加に期待したい。</p> <p>●プログラムの内容について、革新的医療創出に貢献し得る人材養成に必要な知識の提供が十分とはいえない。医療イノベーション推進に必要な知識が網羅的に取得できるよう、教育プログラムの補足を期待したい。</p> <p>●バックグラウンドの異なる学生が、どの程度実用的・実践的な知識と能力を身に付けることができるかも大きな課題であり、さらなる工夫が必要である。</p> <p>●外部評価について、現役の産業界からの委員を入れた方が、求められる人材、必要な教育についてのより客観的な評価が得られるのではないか。</p> <p>●国際医療シンポジウムが開催されているが、本事業で得られた成果や課題の社会への情報提供として、より活発な企画を期待する。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	7
大 学 名	鳥取大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	革新的未来医療創造人材の養成～鳥大発独自教育プログラム「発明楽」の実践～
事業推進責任者	医学部附属病院長 清水 英治
取組概要	
<p>本事業では、発明楽による発案を促し、産官学が強固に連携して出口戦略を描き、新しい市場を創造する実践力を養う。具体的には、大学院医学系研究科に「革新的未来医療創造コース」を新設する。本コースでは、鳥取大学が考案した発明楽授業をさらに発展させ、企業の技術者や弁理士、PMDA薬事専門家等を講師として招き、発案から製品化までに必要な知識を身につける。また、学んだ知識をもとに、革新的医療創造実践として、鳥取大学が企業と連携して行っている世界最先端の医療・介護ロボット開発等の事業について、大学院生が企業開発現場で研修を行う。また、支援組織として次世代高度医療推進センター内に「産業化臨床研究部門」を設置する。本部門には臨床研究や機器開発に精通し国際的な対応が可能な人材を配置し、関連組織や企業、海外との調整等を行う。さらに、男女ともに医師としてのキャリア形成とその継続が可能なシステムの構築を行う。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○当初予定から前倒して大学院生を受け入れていることや、市民公開講座等によって広く社会に情報発信している取組は評価できる。</p> <p>○企業との連携による受講生の研究開発への参画や、海外大学との協定等を活用した海外研修の実施等の取組については、国際化を見据えた教育への配慮が見られる。</p> <p>●「発明楽」というコンセプトはユニークである一方、それを軸にしたプログラムを受講した学生がどのような能力を身につけているか、定量的に評価できる仕組みが必要である。</p> <p>●外部評価委員会からの指摘に対して、改善のための検討は行われているように見受けられるが、具体的な対応をプログラムに反映する必要がある。</p> <p>●外部評価委員会からも指摘されている医師以外の受講生の増加については、他分野の人材との共同作業によって成果を上げることができる医師養成の面からも重要であると考えられるため、積極的に検討いただきたい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	8
大 学 名	九州大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	イノベーションを推進する国際的人材の育成
事業推進責任者	医学研究院教授 中西 洋一
取組概要	
<p>「メディカルイノベーションに強い志を有し、推進し、国際競争に勝ち抜く人材を育成すること」を本プロジェクトの目的とする。そのために以下の取り組みを行う。</p> <p>1) 就学早期からの教育とステップアップする継続的教育: 学部教育に医療イノベーション科目を設置、ARO次世代医療センターでの臨床実習を実施。大学院にメディカルイノベーションコースを設置し。社会人向けに、インテンシブコース等を併設。</p> <p>2) 全工程を完備した教育プログラムと教育体制: 産学官全領域においてメディカルイノベーションを担う専門家の教育参加。</p> <p>3) 福岡県内4大学の大学間双方向性連携体制の下に教育連携体制を充実。</p> <p>4) 国際的視野を有する人材の育成: 熾烈な競争の中で研究開発を勝ち抜く国際的視野を有する人材を育成するための外国人による英語での講義と実習、海外研究者によるセミナーの開催。</p> <p>5) 実戦的かつ効率的な実習: 各大学のAROや治験センターにおける大学間交流実習の導入。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○4大学連携の下、教育カリキュラムの構築やコースの開設等が順調に推進されていることは評価できる。</p> <p>○未来医療研究人材養成に正面から取り組むべく、ARO組織を中心軸とした教育推進体制を構築し、運用できている点は大変優れている。</p> <p>○意欲的な工程を作成し、それを達成していることから、効果が期待できる。</p> <p>○学部生、大学院生、社会人等、それぞれの能力やニーズに応じた多彩で魅力的なコースを展開している。</p> <p>●4大学での連携教育体制の構築が十分ではない。4大学間で知を共有し、他大学のモデルになるように実現してもらいたい。特に、「4大学間の教育水準の調整」への対応がやや不十分のように見受けられるため、現状を把握した上で、調整のための仕組みが必要である。</p> <p>●国際性について、より教育内容の強化が望まれる。</p> <p>●学会発表では、他大学への普及にはつながらないので、より効果的な波及方法を検討していただきたい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	9
大 学 名	長崎大学
テ ー マ	テーマA:メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	「医工の絆」ハイブリッド医療人養成コース～出島マインドで医療ものづくり～
事業推進責任者	医歯薬学総合研究科長 下川功
取組概要	
<p>先進的な医療と機械・電子工学分野の高い技術を生かし、学生・教員相互乗り入れ型の医工連携教育によりハイブリッド医療人を養成する。</p> <p>学部教育では医療ものづくりマインド育成カリキュラムによる医・工学部生の臨床先端医療機器体験実習や両学部研究室でのリサーチセミナーを実施する。</p> <p>医歯薬学総合研究科にハイブリッド医療人養成コースを新設し、産学の講師陣による実践教育と3Dプリンターを用いた医療機器の企画、試作機制作や評価、海外産学連携施設での短期研修等を行う。</p> <p>本コース修了者には、博士(医学)取得時に「医工ハイブリッド医療人」の称号を与える。さらに、博士(工学)を論文博士にて取得可能とする。医学部3-6年次と工学研究科博士前期課程学生の本コースの特別聴講を可能とし、大学院入学後に単位認定する。</p> <p>ハイブリッド医療人地域交流促進室に修了者を人材登録し、地域における医療機器ものづくり相談や企業への雇用促進を支援する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○他学部・学系からの学生受け入れ、企業との連携、海外への派遣に加えて、学生各自がものづくりの一連の流れ・ノウハウを経験して実践力を身につけられる仕組みの整備等がされている点は評価できる。</p> <p>○「垣根を超えた」医工連携の実現だけでなく、実用化に近づいた開発シーズが複数出てきており、実用化を視野に入れた研究開発能力が涵養されている点は注目に値する。</p> <p>○相互乗り入れ型の医工連携教育の成果を通じて、その重要性を積極的に発信していただきたい。</p> <p>●将来臨床現場で必要を感じた際に、スムーズに工学系と組んで共同開発を進めていける臨床側パートナーとなるための教育はどうできるか、考案するとさらに良い。</p> <p>●企業との連携についての対応を強化する必要がある。例えば企業での体験実習の機会を増やす、定期的の実習を行う等の対応を検討してもらいたい。</p> <p>●海外研修の検討が行われているが、人数、研修内容とも限定的なものになってしまう懸念があるため、選ばれた一部の学生のみでなく、広く国際的な視野に立てる医療人の育成を考えた教育内容における充実も考慮してほしい。</p> <p>●ジェンダーバランスに対する取り組みや、医学部生に対して、臨床医になるにしても将来研究開発のパートナーとなっていく心構えを伝えることができればなお良いと考える。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	10
大 学 名	東京女子医科大学
テ ー マ	テーマA: メディカルイノベーション推進人材の養成
取 組 名	医療機器実用化の為に突破力促成プログラム
事業推進責任者	教授 村垣 善浩
取組概要	
<p>医療機器開発のプロセス全体－医療ニーズ探索、プロトタイプ開発、審査承認対応－に通じ、高リスク高度管理医療機器の実用化をも一貫して迅速に推進できる人材を養成する。本学大学院先端工学外科分野を拠点とし、経験豊富な専任メンターのOn the Job Trainingにより、本人がニーズを抽出し解決策を構想、プロトタイプ完成までの開発計画を策定・実行するとともに、医師主導治験を模した「プロトコル作成から承認申請に至る演習」を課すことで開発／薬事両面の習熟を図る。更にビジネスプランコンテストを関門として設け、新アイデアを臨床へ届けるため不可欠な事業的側面の基礎力を養う。加えて海外の医療機器開発の最前線ラボで研修を実施、今後の世界環境変化に対応できるグローバルな発想・思考を涵養する。医学博士課程に「困難の乗り越え方－突破力－を身につけるプログラム」を相加し、先進医療機器の実用化を主導する人材を育てる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○: 優れた点等 ●: 改善点等</p> <p>○ 予定を上回る修了生を輩出しており、また、受講生の主導により機器の機能試作が複数回実施されている点は優れている。</p> <p>○ 工学・薬学系の社会人から多くの大学院生を受け入れ、実践的な教育・トレーニングが積極的に実施されるプログラムが構築されている。また、早稲田大学との共同大学院の授業も特色ある取組であり、成果が期待できる。</p> <p>○ 企業や他大学からの講義見学を広く受け入れ、全国に本事業のコンセプトを発信している。</p> <p>● 学内外を問わず現役の医師への積極的な情報発信、連携等を検討していただきたい。ホームページから得られる情報の充実も必要である。</p> <p>● 大学院での取り組みは評価できるが、受講生以外の学生、教員に対する効果にも考慮してより広く教育効果が現れる仕組みづくりが必要である。</p> <p>● バックグラウンドの違う学生に実践的教育を施す内容であるため、基礎力の土台がないままのバランスの悪い人材が輩出されてしまう可能性が懸念される。他の教育プログラムとの連携も含めたフォロー体制の工夫が必要である。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	11
大 学 名	東北大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	コンダクター型総合診療医の養成
事業推進責任者	東北大学病院 総合地域医療教育支援部教授 石井 正
取組概要	
<p>本プログラムは、高度医療の要否を判断し患者をトリアージしうる最新の医学・医療知識を有し、かつ地域包括ケアを統括するためのリーダーシップを発揮し、地域発臨床研究を推進できる「コンダクター型総合診療医」の養成を目的とする。具体的には、東北大学病院と本プログラム参加医療施設である「地域教育拠点とをICTで連結し、プログラム受講者である各地域教育拠点の後期研修医・医師に対し、東北大学は専門医療や医療マネジメントに関する専門知識・スキルおよびリソースを提供し、かつ地域発の臨床研究を指導・サポートを行い、地域教育拠点は実践的臨床トレーニングや円滑な医療マネジメント学習のためのオンザジョブトレーニングを提供する。これにより医師は地域にいながらキャリア形成およびスキルアップでき、さらに本学大学院に社会人入学したうえでこのプログラムを選択すれば、学位取得も可能となる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○プログラムを地域の医療職にも開放することで、地域の医療レベル向上に貢献している。</p> <p>○後期研修医や一般医師を多く受け入れ、フォーラムの参加人数も多く活発に活動されている。</p> <p>○教員と受講生の地域拠点病院でのディスカッションや受講生を県の地域包括ケア会議に出席させ、現場の情報に基づいて地域の課題を把握できるようにしている点は優れている。</p> <p>○地域と大学の接触の場を作り、受け入れ人数も当初より増やしている。</p> <p>●質、量の両面から地域のニーズに答える人材を育成して欲しい。</p> <p>●課題の把握は、受講生の興味や資質などに左右される面がある。教員との討論でこの点を徹底してほしい。</p> <p>●本プログラムの内容について、担当教員が学会等に参加した際に発表する機会を持ってほしい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	12
大 学 名	筑波大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	次世代の地域医療を担うリーダーの養成
事業推進責任者	教授 前野哲博
取組概要	
<p>本事業では、次世代の地域医療を担うリーダーを養成することを目標とする。教育プログラムは、学生・研修医、後期研修医、総合診療専門医の3つの段階を通して、総合診療医としての高い専門能力・研究能力を修得するとともに、地域医療のリーダーに求められるノンテクニカルスキルも、明確な人材養成目標に向けバランスよく体系的に修得できるのが大きな特長である。実際の教育は、地域医療の第一線を担う病院・診療所に大学教員を派遣する本学独自のシステム：地域医療教育センター・ステーションをフィールドに、大学と地域が一体となって展開する。運営は、附属病院総合診療グループと総合臨床教育センターを中心に、茨城県や医師会、地域医療機関との緊密な連携の下で行う。本事業の導入により、大学-地域循環型のキャリアパスを確立して、将来の超高齢社会における地域包括ケアをリードできる、優れた総合診療医を数多く養成することを目指す。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) S	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を十分に達成し、当初目標を上回る効果・成果が期待できると判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○27年度はすべて受け入れ目標数を達成、あるいはそれを上回る受講者を受け入れている。また、多様なプログラムが用意され、教育内容も充実している。</p> <p>○総合臨床教育センターの協力を得て緻密な進行管理を実施できる体制となっている。</p> <p>○種々の広報活動を行っており、プログラム受講者の増加はその成果と考えられる。</p> <p>○学生・研修医を対象とした総合診療塾の全国公開セミナーにおいてキャリアセッションを開講し、学生レベルからの総合診療医のキャリア形成支援を継続していることは評価できる。</p> <p>●修了者が地域のリーダーとして活躍していることを目標としているが、その進捗について積極的に情報を発信してもらいたい。</p> <p>●外部評価体制において、地域包括ケアの関係者をメンバーに加えることを検討してもらいたい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	13
大 学 名	千葉大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	超高齢社会に対応する総合診療医養成事業
事業推進責任者	医学部附属病院総合診療部教授 生坂 政臣
取組概要	
<p>超高齢化社会での様々な問題を解決できる総合診療医を、大学の医・薬・看が地域と一体となって養成する事業である。卒前教育においては地域医療を課題としたテュートリアル、診療所での参加型臨床実習や多職種連携教育などの導入により学びの場を地域へシフトする。卒業研修においては、指導医を常駐させた診療所群を設置し、多職種連携のもとで在宅看取りを含めた地域医療を実践しながら、これらの施設と情報通信技術で繋いだ本院総合診療部のカンファレンスを地域で展開・共有し、包括的な診断能力の獲得を目指す。さらに寄附講座や大学院との連携により、学位を有し地域包括ケアを科学的に推進する指導医を育成しつつ、育った指導医がロールモデルとなり次世代の総合診療医を輩出する“育成サイクル”の仕組みを作る。また総合診療専門医取得コースや再研修コースを設置し、キャリアパスを明示するとともに、他領域から総合診療への移行を支援する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等	
<p>○卒前から卒業後、さらにその後長期間にわたって地域医療を支える医師の教育システムを構築しようとしている点は評価できる。</p> <p>○本事業で得られた知見に基づく多くの研究発表や症例報告がなされており、「リサーチマインド」のテーマにふさわしい活動として評価できる。</p> <p>○インテンシブコースには医師以外の職種も多く参加しており、今後の成果が期待される。</p> <p>○各コースの登録者を増やすべく各種セミナー等について様々な取り組みが積極的に実施している。</p> <p>●工程管理や恒常的な外部評価体制の構築など、PDCAサイクルの確立するため検討が必要である。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	14
大 学 名	東京大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	新しい大学ー地域間連携での研究人材育成
事業推進責任者	東京大学大学院医学系研究科研究科長 医学部長 宮園浩平
取組概要	
<p>「治し、支える医療」の実践にむけ、教育・研究・臨床の3部門を担う在宅医療学講座を設置し、高度急性期を担う東大病院から、在宅療養を含めた包括的な視点に立った新しいスタイルの地域医療連携モデルを提示する。具体的には、地域の行政や医療機関と本学の協働モデルである柏地区の基盤も活用し、本郷の東大医学部及び病院によるリーダーシップの下、①学部学生、研修医、開業医等を対象に大学ー地域間連携に重きを置いた形での在宅医療の臨床教育を行い、地域包括ケアを支える医療人材の養成や医道の再教育に取り組むとともに、②在宅療養の虚弱高齢者、難治疾患患者等への臓器横断的・全人的な診療アプローチを基盤とした臨床研究を推進し、暗黙知が多い在宅医療の臨床の現状を本学の試みによって学問体系化し、③「生活臨床」に向けての学問体系の確立を目指して、在宅医療分野における大学のロールモデルを示し、日本の医療改革の橋頭保の役割を果たす。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) C	
改善事項があり、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の大幅な変更が必要と判断される。	
(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等	
<p>○学生の地域医療学実習がH28年度から必須となり、学部教育が充実することによる成果に期待したい。 ○十分な研究基盤があるとはいえない在宅医療に関する臨床データベースが構築されつつあるのも期待できる。</p> <p>●学生から研修医、専門医まで継続した体制が重要と思われるが、研修医のコースが確立されておらず、また専門医の受け入れ人数も2名と少ない。人材養成に力を注入する必要があると思われる。 ●学生、研修医、受講者等の満足度や知識レベル、臨床能力等の客観的評価も実施してほしい。 ●卒前、卒後教育(初期研修、後期研修)での在宅医療の教育は他大学でも取り組まれている。「在宅医療を中心とする」カリキュラムがどう優れているのか不明である。どう世界をリードするのかの方略が不足している。 ●医学部生の受け入れとしての多職種連携のみならず、多職種連携を目指した(多学部にわたる)学部教育が必要ではないか。 ●それぞれの地域でどのように取り組むと連携につながるのかというノウハウの発信こそが重要と思われる。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	15
大 学 名	新潟大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	オール新潟による『次世代医療人』の養成
事業推進責任者	新潟大学医歯学総合病院病院長 鈴木 栄一
取組概要	
<p>本プログラムでは、先の補助金において確立した多職種連携と、医歯学総合病院としての強みを活かした医歯学連携による口腔ケア、保健学科や県内の医療系大学との多職種協働、地元自治体や医師会及び住民等と連携したオール新潟体制を事業基盤とする。これにより幅広い総合診療能力に加えて機能維持、機能回復の視点による生活不活発病予防などの予防活動を学ぶ卒前、卒後の一貫した実践プログラムを設定し、これを通じて超高齢化社会の住民を支え、『健康長寿社会』の実現に寄与する医療人を養成することを目指す。新潟県の高齢化の現状は20年後の日本であり、今後急速に進む都市部の高齢化にいち早く取り組み、住民に寄り添うマインドや予防医療の視点、地域の課題に柔軟に対応する力を持ち地域医療のリーダーとして活躍する総合診療医の養成を行うことは、日本の未来医療のモデルとなる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
<p>おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○地域住民の健康相談を通じて、地元で研究成果を還元している。ソーシャルキャピタル(地域の人々への信頼度)、口腔ケアの重要性を学ぶ事が出来ている。その結果、受講生の認識の変化が見られる。</p> <p>○地域医療ニーズの把握のため、県内の入院機能を持つ病院に基礎的調査を行っている。</p> <p>○指摘内容については実行されているとは言い難いが、独自の方向性を示している。</p> <p>○かかりつけ医の重要性等を強調し、病院完結型医療から地域完結型医療への転換の一助となっている。</p> <p>●受入人数が目標に達していない。特に、プライマリコースは受入人数が非常に少ない。アドバンスドコースも受入人数が少なく、教育効果・評価も十分とは言えない。</p> <p>●良い教育プログラムを開発しても、参加者がいなければ効果は得られないことから、アピール方法、地域医療への親和性の育成方法を検討してほしい。学生や研修医等、受講者の満足度や知識レベル、臨床能力等の客観的評価も実施してほしい。</p> <p>●成果・効果の発表が小規模にとどまり、全国発信への指向性が認められない。</p> <p>●医療ニーズは病院、診療所の一体型のニーズが望ましい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	16
大 学 名	富山大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地域包括ケアのためのアカデミックGP養成
事業推進責任者	医学部長 北島 勲
取組概要	
<p>本事業では、地域包括ケアシステムを構築するために、富山大学に「とやま総合診療イノベーションセンター」を設置し、富山の地域医療の養成ゾーン(教育・研究・政策)と実践ゾーン(地域医療・多職種連携)を一本化する。そのために、養成ゾーンと実践ゾーンの各々を専門とするリサーチマインドを持ったアカデミックGPの養成を行う。人材養成は、ステップ1(医学生)で地域医療の理解と研究マインドの涵養を行い、ステップ2で専門医取得の準備をし、ステップ3で総合診療ライセンス(専門医)を取得、ステップ4(インテンシブコース)でアカデミックGPの育成を行う。総合診療以外の専門医の転職や女性医師の復帰支援として、ステップ4から参入を可能とする。本事業は、富山大学、県、市町村、医師会、地域医療機関、多職種医療関係者、および住民によるオール富山で取り組む。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	
(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等	
<p>○総合診療医と在宅医の多様なプログラムが設けられており、地域包括ケアの牽引と、医療のパラダイムシフトの契機となる。</p> <p>○HPの更新が年を追うごとに増加し、社会への発信力も大きい。</p> <p>○ステップR 総合診療の研究者養成コースはプログラムが充実しており、従来の総合医養成コース以上の成果が期待される。</p> <p>○女性のキャリア形成支援活動が充実しているほか、住民への情報発信という点で成果がある。</p> <p>○地域包括ケアシステム構築のため、住民マイスターというユニークな制度を定着させている。</p> <p>●参加機関の有機的な繋がりができていない。</p> <p>●予防や介護等を含め、地域の医療に関してリーダーとなれる広い視野を持ったGPの養成が求められる。</p> <p>●ほとんどのプログラム・コースで教育効果の評価が適切に設定されていない。海外講師による講演会の位置づけと成果の評価が不明確である。</p> <p>●地域包括ケアに関して、実際に専門職である医師の教育ができていないか明確ではない。</p> <p>●医学生にリサーチマインドを教育するプログラムが不足している。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	17
大 学 名	三重大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	三重地域総合診療網の全国・世界発信
事業推進責任者	医学系研究科教授(教務委員長) 竹村 洋典
取組概要	
<p>① 三重県全地域に地域医療学講座を設立して、総合診療医を効果的に育成</p> <p>② 良質な総合診療医を育成する指導医を育成(「アカデミックGP教育コース(PhDコース・non PhDコース)」)、その医師を全国へ派遣</p> <p>③ 地域で診療する臨床医が総合診療医育成の指導医になるための「地域での総合診療指導医養成セミナー」を開発・実施</p> <p>④ チーム医療の要となるため、卒前教育から卒後臨床研修で多職種連携教育カリキュラムを構築(「多職種協働のチーム医療プログラム」)</p> <p>⑤ 地域住民のニーズに合致する医療・保健・福祉、そして地域の問題などを明らかにする調査</p> <p>⑥ リサーチマインドを持った総合臨床医を育成するために全学そして他大学とともに公衆衛生大学院的な「総合診療のためのPhDコース・Masterコース」を設置</p> <p>⑦ 女性医師が働ける、または家庭でも総合診療能力を維持できる環境を構築</p> <p>⑧ 海外の発展途上国などでも医療、保健や医学教育の支援ができる人材を育成(「海外総合診療医チャレンジコース」)、その人材派遣のための仕組みを構成</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○プログラムに参加した医師が各自の職場で教育や研究を指向する良い流れができています。</p> <p>○PhDコースが充足していることは評価できる。</p> <p>○本事業で教育を受けた教員が他大学の総合診療部門に異動し、教育・研究の普及に寄与している。</p> <p>○e-learningの整備等、遠隔地の受講者の便宜を図っている。</p> <p>○多職種養成大学との連携については大いに参考になる。また、保育所整備や、テレビ会議システムを使用した在宅での教育・研修も参考になる。</p> <p>●どのコースも評価の方法に更なる検討を要する。特に、教育実施能力についての評価は、研究指導教員の評価だけでは十分ではないと思われる。</p> <p>●他機関等との連携をより具体的に考えていただきたい。</p> <p>●更にキャリア教育支援を意識した取り組みが望まれる。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	18
大 学 名	大阪大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地域に生き世界に伸びる総合診療医養成事業
事業推進責任者	医学系研究科 老年・総合内科学 教授 樂木 宏実
取組概要	
<p>大阪大学の「地域に生き世界に伸びる」という理念を、超高齢社会の医療システム充実や世界に発信できる社会システム構築に反映できる研究人材を養成する。本事業の柱は、</p> <p>①地域の高齢者医療においてリーダーシップを発揮できる総合診療医の養成、</p> <p>②世界に発信すべき社会システム構築に貢献できるリサーチマインドを持った人材の養成、の2点である。大阪大学に課された大きな地域的課題である千里ニュータウンの再生に、リーダー型総合診療医養成の観点から貢献し、ニュータウン再生プランの輸出産業化に向けて世界に情報発信する。臓器別の高齢者に対する高度医療の一元的教育や、研究と連携した実習教育、医学以外の分野との連携による教育などによりリサーチマインドを涵養し、海外研修も含め世界への情報発信力強化を図る。多面的なプログラムは、卒前・卒後教育の様々な場面で参加可能で、相互補完を持たせることにより多様な人材を育成する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等	
<p>○事業推進ならびに人材養成拠点としての事業継続性を目的とした体制整備に、早くから積極的に取り組んでいる。</p> <p>○多様な活動に対して、適切な評価がなされており、大学、自治体、企業等との連携が進んでいる。</p> <p>○在宅診療の研修においても主治医として積極的にかかわり、内容についても指導医からの評価がきちんとフィードバックされている。また、多数の医学生と他学生が参加しており、学生への教育効果が高い。</p> <p>○自施設にとどまらず、今後全国レベルでの人材供給についての展望、計画が練られている点が良い。</p> <p>●達成目標となっている総合診療医と直接結びつかない専門医もいる。</p> <p>●B・C・D・E・Fコースでは、eラーニングが大きな役割を占めているが、単に講義の録画を各自再生するだけの学習であれば、インタラクティブさに欠ける。</p> <p>●フォーラムの開催実績が少ない。地域包括ケアを進める上でも、幅広い受講者に対するフォーラムの実施が期待される。</p> <p>●他大学への働きかけが少ない。また、ITの活用の利点について具体性に乏しい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	19
大 学 名	島根大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地方と都会の大学連携ライフイノベーション
事業推進責任者	島根大学長 服部 泰直
取組概要	
<p>超高齢者社会の複雑化多様化したケアニーズに対応できる総合診療医育成のため、高齢化先進県の島根大学と近未来高齢化県の神戸大学、兵庫医科大学の3大学が連携して相互補完を図るとともに県市町村、関連医療機関・団体との連携による地域包括ケア人材育成体制を構築する。各大学の総合診療医育成コースに加え、①地域包括ケアに関する経営能力を備え、現場で多職種と連携して包括ケアを管理できる。②自ら地域包括ケアの課題を把握し、研究を遂行する。③地域住民の視点に立ち、グローバルリーダーとして活躍できる人材養成プログラム等を選択履修するコース等により、リサーチマインドを持った、地域包括ケアに貢献できる総合診療医を育成する。このため、島根大学は主導的地域包括ケア人材養成拠点、神戸大学はグローバルリーダー養成拠点、兵庫医科大学は都市型地域包括ケア人材養成拠点として、関連機関との間で地域包括ケアコンソーシアムを運営する。</p>	
中間評価結果	
<p>(総合評価) B おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○地域特性の異なる3大学がユニークなプログラム・コースを設定し、地域包括ケアの構築、大学院教育との連携を図っており、多くの成果・効果が出ていると理解できる。教育プログラムを適切に見直している。</p> <p>○地域包括ケア連携人材養成コースは、多職種連携を意識し、大学院生の参加もあり、充足率が高い。</p> <p>○なでしこ女性医師養成コースでは、カフェ形式で参加者がフラットに意見交換を出来る場を設けている。</p> <p>○島根大学の地域特性に鑑みプログラム・コースを大学院生を中心として再構築した。</p> <p>●多様なコースが準備されているが、大学院生の受け入れが少ない。コースによる充足率のばらつきが大きい。また、フィールドを認知症に限定せずに、幅広くリサーチマインドの涵養に努めるべきである。</p> <p>●総合診療医と内科総合医は異なる専門領域であり、教育プログラム・コースは別に運営すべきである。</p> <p>●グローバルリーダー人材養成コースは、海外研修の成果を継続的にプログラム内で発展させる取り組みが望まれる。</p> <p>●各コースについて形成的評価が中心に記載されているが、コース修了認定などに資する総括評価についても基準を明確にすべきと思われる。</p> <p>●内部評価と外部評価の合同委員会という形は適切なものか。外部評価の第3者制を担保するならば、内部の運営委員会で総括したものを外部評価に委ねるべきと考える。さらなる体制整備が求められる。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	20
大 学 名	岡山大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地域を支え地域を科学する総合診療医の育成
事業推進責任者	大学院医歯薬学総合研究科教授 片岡 仁美
取組概要	
<p>本プロジェクトでは岡山大学と地域医療機関・自治体が連携してリサーチマインドと優れた臨床能力を有した総合診療医を育成する。臨床面では高齢化が進み医師不足も深刻な県北の二次医療圏を必修の研修エリアに組み込み、診療所と地域の病院が協働した多彩な研修プログラムを構築する。中山間部研修と都市部研修の組み合わせによって、地域包括ケア、家庭医療、在宅緩和ケアと総合診療、救急等をバランスよく学ぶ。岡山大学は教育リソースの提供を介して全面的なバックアップを行う。研究面ではアカデミックGP養成コース(博士課程)とMPHコース(修士課程)を設置して生物統計や疫学などの基礎から指導し、臨床現場から臨床研究や質的研究を介してエビデンスを発信する研究者の育成を促進する。教育の充実と連携によって地域の課題をより良い総合診療医を育てる最適環境に転換する本プロジェクトはどのような地域にも応用可能かつ波及効果が期待できる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○ アカデミックGPコース、MPHコースについては順調な経過である。</p> <p>○ 県内の幅広い地域に地域医療活性化の役割を果たしており、単なる人材育成にとどまらず、地域医療の底上げに貢献できている。</p> <p>○ 医学生に対する事前のコミュニケーション実習、更には共感尺度による変化の測定など、単なる体験にとどまらない適切なシステムを構築している。</p> <p>○ 女性医師をサポートするコーディネーターの設置等、サポート体制の充実は先進的である。</p> <p>● 後期研修プログラム登録者のうち、家庭医療コースの参加者が少なく、より一層の努力が必要である。また、GP養成コースのうち、内科と家庭医療を分けて後者の志望者が少ない要因を分析するべきである。</p> <p>● 地域包括ケアに関するプログラム等が目標の段階である。早期に教育体制を構築してほしい。</p> <p>● 大学内の組織がGIMセンターという形で総合内科領域として設定されているが、地域全体を診る視点を持つ総合診療部門の設置が必要ではないか。事業終了後に単なる内科として変容する可能性を危惧する。</p> <p>● 教育方法や教育に関与する機関相互の連携が不十分である。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	21
大 学 名	九州大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地域包括医療に邁進する総合診療医育成
事業推進責任者	大学院医学研究院臨床医学部門病態修復内科学分野教授 赤司 浩一
取組概要	
<p>九大病院、医学学府、関連医療機関が連携し、学部、初期・後期研修、大学院教育を通じて、包括的地域医療の中心を担う総合診療医育成</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域医療関連授業および臨床実習を系統化・拡充することによる、学部教育における動機付け 2. 後期研修・大学院に総合診療医コース設置。女性医師・専門医のためのインテンシブコース設置。 3. 総合診療科・小児科・救命救急センターによる一次～三次救急診療教育 4. 総合内科3講座の長期ローテートを柱にした総合内科学研修教育 5. 医療経営・管理学専攻分野等大学院を中心とした「ヘルスサービスリサーチ」教育 6. 地域医療研修を通して地域連携・病診連携教育 	
中間評価結果	
<p>(総合評価) B おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○臨床推論、在宅医療、ヘルスサービスリサーチ等、必要な研修が行われている。 ○教育効果があり、総合診療医の育成効果がある。 ○地域医療で求められる女性医師の受講者が増えている。 ○総合内科三科を含めたローテーションが特徴的である。</p> <p>●在宅医療の分野は見学に終わるのではなく、より参加型であることが望ましい。 ●受講生のいないコースがある。学生に関し体験実習を実施しているが、評価は筆記試験で適切に評価できるのか。 ●キャリア形成支援について、本事業のために新たに講じた取組内容の説明は不十分である。 ●今後他大学への普及・促進の取り組みが求められる。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	22
大 学 名	長崎大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	つなぐ医療を育む先導的教育研究拠点の構築
事業推進責任者	医学部長下川 功
取組概要	
<p>地域包括ケアシステムを理解し、円滑に実践できる人材を育成する。関わる全専門職種と良好な連携が取れ、多様な医療を提供できる医師、さらに、超高齢化社会に伴う諸問題を研究する医師を継続的に輩出する仕組みを構築する。</p> <p>医療・福祉・介護・介護予防等の地域包括ケアシステムや急性期病院、回復期リハビリ病院、自治体等の教育資源を統合し、活用する。</p> <p>カリキュラムを再編統合し、卒前・卒後一貫教育システムを構築する。卒前は地域ケア実習を含め、地域包括ケア教育を全医学生が受ける。医療・福祉系の共修や地域実習の中で多職種連携の重要性を学び、さらに卒後臨床研修や生涯教育に繋げ、総合的診療能力やマネジメント能力の養成を図る。</p> <p>長崎純心大学と連携し、相補的な教育体制を確立し、地域包括ケア教育の質を向上させる。</p> <p>地域中核病院に連携大学院、地域包括ケア講座を開講し、地域包括ケアの研究を推進させると共に、若手医師の研究志向を啓発する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○医学生に対する地域包括ケアの理解を促す取り組み等は大変効果的である。</p> <p>○客観的多職種連携教育評価を行っている。医学部教育の改善については一定の結果が出ていると思われる。</p> <p>○地域へのアウトカムとなる総合診療医養成が明確に最終目標として掲げられている。</p> <p>○医療と看護の相補的な学習体制は誇るべき成果である。</p> <p>●総合診療に専門的に取り組む人材の養成については成果が乏しい。</p> <p>●教育体制の構築は良いが、研究についての取り組みは具体化しておらず不十分である。</p> <p>●総合医・家庭医コース、地域総合医養成コース、地域包括ケア研究医養成コースの評価が曖昧である。</p> <p>●医師がリサーチマインドをどのように養成するか具体性に乏しい。</p> <p>●講義にとどまらず、地域包括ケア推進の具体的な連携構築等に向けて検討を進めて欲しい。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	23
大 学 名	札幌医科大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	北の地域医療を支える総合診療医養成プラン
事業推進責任者	病院長 山下 敏彦
取組概要	
<p>本学では、これまでに北海道の地域医療を担う医師育成を目的に地域医療枠15人、北海道医療枠55人の入試制度改革や本学独自の特徴的な地域医療実習を実践しており、この実績に新たに総合診療教育を強化したプログラムを構築する。まず、保健医療学部とのチーム医療地域実習を拡充・必修化し、地域医療枠を含む全学生が総合的な医療を学べるプログラムを作成する。卒業教育では、①総合診療医養成特化コースを創設し、指導医派遣で本学と連携関係にあり、総合診療医育成実績のある江別市立病院と町立松前病院等に、本学分室を設置、専任教員を配置して、強力な指導医体制で総合診療医を養成し、更に疫学や予防医学等の実績のある研究指導体制を整備する。また、②総合診療マインドを持つ専門医養成コースとして、内科専門医を取得する中で幅広い視野で患者を診られる医師の養成に取り組む。本学と地域病院が連携して多様な対応ができる総合診療医を養成する。</p>	
中間評価結果	
<p>(総合評価) B おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○学部学生に地域医療についての関心を持たせることや、総合診療医の育成はほぼ達成できている。 ○総合診療マインドを持つ専門医養成コースが充足していることは評価できる。 ○他大学でも地域の医療機関との連携のモデルとなる。</p> <p>●地域に密着した臨床研究、疫学研究を実施できる人材育成の体制が不十分である。地域が抱える課題と解決に関する教育が不十分である。 ●リサーチマインドを養成しながらキャリア形成するためのキャリア支援センター設置の実現が望ましい。 ●テレビ会議システムの効果以外にも、広い北海道の土地柄を生かした取り組み成果があればと思われる。また、情報発信が不十分である。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	24
大 学 名	名古屋市立大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	地域と育む未来医療人「なごやかモデル」
事業推進責任者	大学院医学研究科教授早野 順一郎
取組概要	
<p>本事業では、学生や若い人材が住民と協働しエイジング・イン・プレイス(AIP)コミュニティづくりに取り組む実践研修の場を、超高齢化の先行する名古屋市内最大のUR団地に形成し、医・薬・看・リハビリ・工学の学部・研究科、大学病院が連携して、AIP社会の医学・医療の発展と向上を担う人材を養成する。卒前教育、初期・後期研修、大学院2コースを含む5つのプログラムを開設し、一貫した多職種連携教育を通じて、AIPに必要な地域診断、地域再活性化から、ICTによるチーム在宅医療・包括ケアシステムの構築に至る総合的な課題解決能力を持った総合診療医、コミュニティ・ヘルスケア指導者、ICT医工学の実践的リーダーを育てる。地域にコミュニティ・ヘルスケア教育研究センターを置き、教育指導、疫学や医工連携研究の指導、地域医療人のキャリア支援を行う。これにより質の高いAIP社会の形成と後継育成に資する有能な人材を輩出する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○地域との連携、多くの医療専門職養成機関との連携が図られている。</p> <p>○コミュニティケアや在宅医療に関する講習や実習については一定の成果が得られている。</p> <p>○地域自治会との協力による訪問実習は、住民との連携教育という意味で意義深い。</p> <p>●一過性の論文作成ではなく、臨床研究を持続する体制づくりが求められるが、その枠組みは見えていない。</p> <p>●本事業で中核的な役割を果たす総合診療医の育成については十分な成果が得られず、今後の方向性も見えてこない。</p> <p>●医学生・医師のキャリア支援とは関連が弱く、具体的なキャリアサポートのシステム構築が必要である。</p> <p>●他大学からの見学者にとどまっており、外部に発信し、普及していくシステムが脆弱である。また、指導体制が不明確である。</p>	

「未来医療研究人材養成拠点形成事業」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	25
大 学 名	東京慈恵会医科大学
テ ー マ	テーマB:リサーチマインドを持った総合診療医の養成
取 組 名	卒前から生涯学習に亘る総合診療能力開発
事業推進責任者	総合診療部 教授・診療部長 大野岩男
取組概要	
<p>地域と大学が強く連携し、卒前から卒後・生涯に亘る時間軸の中で、「幅広い多様性」という総合診療の専門性を基礎に、地域医療で生じた問題を自ら解決するための臨床研究を発案・遂行し、エビデンスを発信できる医師を養成するプログラムを開発する。本学は既に卒前教育において地域での様々な医療ニーズを体験する実習を低学年から体系的に導入し、社会人教育として地域医療に従事する医師を対象に臨床研究者育成プログラムも実施している。そこで本事業では、卒前、臨床研修での「地域医療体験」の拡充、専門修得コース(レジデント)における教育病院・施設群と連携した「総合診療コース」の新設、大学院博士課程での授業細目「地域医療プライマリケア医学」の設立、大学院と専門修得コース(レジデント)のコンバインドプログラムを構築し、プライマリケア現場で活躍するclinician researcherを育成する全学的なシステムを開発・整備し、地域医療のための人材養成拠点となる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
<p>順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。</p>	
<p>(コメント) ○:優れた点等 ●:改善点等</p> <p>○臓器専門医から地域の総合医への再研修の独創性が良い。</p> <p>○多くの英文論文の公表に見る如く、リサーチマインドを持った総合診療医の養成に成功している。</p> <p>○地域医療プライマリケア医学の受講機会の拡大、総合診療研修センターの設置等、一過性に終わらない成果が出ている点は高く評価できる。</p> <p>○復職支援スタートアッププログラムへの取り組みは高く評価できる。</p> <p>○ベテラン医師をプライマリケア医として養成するプログラムは他大学の参考となる。</p> <p>●総合診療専門医プログラムへの登録数が少ないので、積極的な受け入れが必要である。</p> <p>●介護老人保健施設に研修が集中し、地域包括システムの理解が片寄る可能性がある。</p> <p>●高齢者総合機能評価、地域包括ケア、認知症ケア等についても教育プログラムを充実させること。</p> <p>●病院総合医に求められるのは、救急医療や漢方医療だけでなく、心理・社会的困難事例や多疾患合併患者のケアであるが、その配慮が不足している。</p> <p>●外部評価者をもう少し多く、かつ多彩なメンバーで構成し、評価してもらった方が良い。</p>	